



とける(きょうと) 抽乃の秘室

試し読み版

冬野ひつじ
表紙イラスト：鈴音丸お

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『とろけるいもうと 袖乃の秘密』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



とける(まうと)

— 柚乃の秘宝

冬野ひつじ
表紙 / 鈴音れな

登場人物紹介

Characters

もりしたゆうの

森下 柚乃

私立六花女子学園に通う女子校生。以前はよく遊んでくれた兄の一樹との距離がだんだん広がっていることを不安に思っている。

もりしたかずき

森下 一樹

柚乃の兄。大学院生で最近は一樹と一緒にいる時間が少ない。

「……これでよしっ、と」

手の中の携帯に目を落とし、ブレザー姿の小柄な少女は満足げに呟いた。

「うん、今度の服もバッチリ似合ってる」

ベッドの上へぺたりと座り込み、黒目がちのつぶらな瞳で熱心に見詰める先には、びよこびよこ動く二頭身の黄色い生物。携帯で飼育する『ITUKI』と名付けたこの仮想ペットの世話が、最近の彼女の大事な日課の一つだった。

「……うふふ、おやすみ」

頬を染めながら甘い声で囁き携帯を閉じると、ストラップの先で揺れる指輪に軽くキスをする。

「今日も一緒に寝ようね、お兄ちゃん……って、やだっ、何言ってるんだろ私……っ！」

言った途端に一人で盛大に照れて、少女は、ばすん！と枕に顔を埋める。その勢いで、栗色の柔らかなツインテールがシーツの上で波打った。

「……はぁー、今日も遅いのかな、お兄ちゃん……」

腹這いの格好のままニーソックスの脚をバタバタさせたせいで、めくれかけたチェックのプリーツスカートから白い太腿が覗いているが、本人は全く気に留めている様子はない。少女の名前は森下柚乃。夜明け前の空のような深いブルーを基調としたブレザーと、その胸元に映える雪の結晶をモチーフにした特徴的なワッペンは、ミッシェン系の名門校『私

立六花^{りっか}女子学園』のものだ。

「……今夜はせっかく唐揚げにしたのに……研究研究って、たまには温かいうちにごはん食べてよお……」

パステルピンクで統一された部屋にはウサギや猫のぬいぐるみ並び、女の子特有の甘やかな空気を漂わせているが、枕元にはティーン向けの華やかなファッション誌に交じって、付箋だらけの分厚い料理雑誌が何冊も広げられている。

「前はあんなに美味しいって言って食べてくれてたのに……」

兄の一樹は大学院生だが、近頃は深夜の帰宅が多い。柚乃の登校時間はまだ寝ているし、夜は夜で顔を合わせたとしても、おやすみの挨拶もそこそこに自分の部屋に入ってしまう。いくつもの部活からの誘いを断って毎日真っ直ぐ帰宅しているのは兄に晩御飯を作ってあげたい一心からなのだが、腕を振るった今夜の献立もラップをかけられたまま冷蔵庫行きになりそうな気配だった。

「DVDだって、まだ観せてもらってないのがいっぱいあるし、ゲームだって……」
枕を抱えて少女は深い溜め息をつく。

「……一人でやってたってつまらないよ」

今年の春に中等部を卒業するまでは毎日隣の部屋で何時間も過ごすのが当たり前だったのに、それはもう随分と遠い昔のことのようだった。

（ただ一緒にいたいだけなのに……もう、それもダメなの？）

煙草の煙と夏草のような体臭が混ざった一樹の匂い。それを嗅ぎながら広い背中にもたれかかって甘えるのも、そのたびに困った顔になる兄を見るのも柚乃は好きだった。

「……………はぁ……………」

今夜も壁の向こうは静まり返っている。

さらに深い溜め息が、柔らかそうな桜色の唇から漏れる。いい加減兄離れをしなければいけない時期だとは自分でも思っていない。

（分かっている、分かっているの……でも……………）

可憐な少女は、ふるんと頭を振るった。

「……………お兄ちゃんは何も分かっている」

看護師で夜勤の多い母と出張で不在がちの父の代わりに何かと面倒を見てくれた兄。傍にいてくれることが当たり前だと思っていたのに、いつの間にかその距離は一方的に開いてしまっていた。その事実が悔しい。

「お兄ちゃんの、ばか」

万感を込めた呟きも、白い枕に虚しく吸い込まれる。

「……………全然分かってないんだから」

お笑い番組でもやっているのか賑やかなテレビの音を遠くに聞きながら、柚乃はしばらく

くベッドに突っ伏していた。

「たまには私のことも見てくれないと、あの時みたいに……私……また……迷子になっちゃうよ……?」

携帯を掴むと、ごろんと仰向けになって指輪を明かりにかざす。

「そしたらまた、あの時みたいに捜しに来てくれる……?」

ハート型の赤い石の向こうに甦ってくるのは、懐かしい情景——まだ小学校に上がる前、夏祭りの境内で迷子になって泣きじゃくっていた記憶。

（どんなに人ごみの中を歩いてもお兄ちゃんはいなくて……とても怖くて、心細かったっけ……こんな風に）

そんな彼女を探し出してくれたのもやつぱり兄だった。怒りながらも強く握ってくれた掌の感触は、今でもしっかりと覚えていいる。

『……ほら、これやるからもう泣くなよ』

そう言って嵌めようとしてくれた射的の景品は幼い指にはぶかぶかで、そのうえ貫ったお小遣いは弾につき込んでしまっていたため、結局空腹のまま兄妹は夜道を帰るハメになったのだが——。

（でもあの晩、私は決めたんだもん）

やっとなサイズが合うようになったオモチャの指輪に、左手の薬指を当ててみる。

(大きくなったら絶対にお兄ちゃんのお嫁さんになるんだ、って……そしたらその時には……これをもう一度……)

深紅のハートが、ふいに滲んだ。

「……って、どうせ全然覚えてないよね」

零れそうになった涙を袖口で拭い、ツインテールの少女は軽く口を尖らせた。

「せめて兄として、たった一人の妹の変化には気づいて欲しいのになぁ……」

高等部に入ってから勉強を始めた手料理も、規定より少し短めにしてみた制服のスカートも、毎朝時間をかけて結っている髪も、ベクトルの先の当の本人にはピンと来ていないらしいのが、もどかしくて堪らない。

「シャンプーだって、せっかく変えたのに」

奮発して揃えた薔薇の香りのシャンプーとリンスはコロン代わりに使い始めたものだが、これまた清々しいまでのスルーっぷりだった。

「それとも、いつそ切っちゃってみんなみたいにモデル系にした方がいいのかな……？」
くりくりとした瞳の、小動物のような雰囲気を持つ彼女にはこのツインテールがよく似合っているのだが、友人達にそう言われても最近は素直に喜べない。

「……でもこれはこれで伸ばすの大変だったし、勿体ないし……」

ぶつぶつと呟きながら窓辺のぬいぐるみを見渡した柚乃は考え込む。

(この部屋を、もっと大人っぽく……ううん、全部お兄ちゃんから買ってもらった大事なコぼっかりだもん、片づけるなんてできないよ)

思案の末、部屋のレイアウトに関してはとりあえず諦めることにする。

「もうっ、年頃なんだからちよつとは悪い虫の心配くらいしてよ……彼氏とか作っちゃっても知らないんだからね……っ」

わざと乱暴に手足をばたつかせたあとで、指先に触れた髪を掴み、鼻先に近づけた。

「……やっぱり、いい匂い………」

甘く優雅な芳香をいっぱい吸い込む。

「これで恋が叶うって……本当だったらしいのに………」

広告の文句なんか信じてはいないけれど、それでも何故か買ってしまったシャンプー。この香りが似合う自分になれるには、あとどれだけかかるのだろう。そう思うと、また胸が痛くなってくる。

(……あの日の約束……お兄ちゃんは忘れているかもしれないけど……私は、まだこんなに……)

その時、窓の外で微かにバイクのエンジン音が聞こえた。

「帰ってきた!!」

聞き慣れた音に、深い憂いの表情はたちまち歳相応の快活さに満ちた愛くるしいものへ

と変わる。

「そうだ！ 唐揚げ、温め直さなきゃ……！」

別人のような明るい声を上げ、

「おかえりなさいっ！」

バネのように跳ね起きた少女は賑やかに部屋を飛び出していった。

「……う……んっ……」

タールのように粘つく眠りの底で、柚乃の意識は得体の知れない重量感から逃れようともがき続けていた。

（なんでこんなに……身体が重い……？）

寝返りを打とうとしても身体が動かせない。全身にうっすらと滲む汗でパジャマが張りつく。その感覚だけが妙にはつきりとしていて、気持ち悪い。

「う……んん……っ……」

寄せた眉の下で薄い瞼が苦しげにびくびくと痙攣する。

（私の上に……誰かが乗ってる……!?!）

はっと目覚め、恐る恐る彷徨させた視線の先に黒い影が見えて、柚乃は何度も瞬きを繰り返した。

「ひああっ……もうだめえっ!!」

（だめっ、このままじゃ私……っ!!）

宙に浮く小さな爪先が、ぎゅっと内側に折り曲がった。

「ダメっ! ダメダメえええっつ!!」

大きく跳ね上がった身体を中心、肉穴の入口で、熱い液体がしぶきを上げる。

「いやああ……っ!!」

頭の中が真っ白な閃光で満たされ、そのまま少女はクリトリスで絶頂を迎えていた。

「……ひあ……はあっ……はあっ……」

まだピクピクと小さく震えている淫突起から来る快感に息を乱したまま、少女は仰向けのまま呆然としていた。

（こんなの嫌なのにつ、どうして私……）

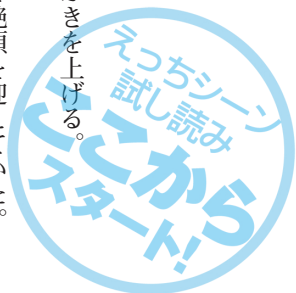
「入れてもいないのに潮を吹くなんて、よっほど男が欲しかったのかな？」

（……違う……そんなこと言わないで……）

「俺の顔までビショビショだ」

わざとらしく顔を拭うような仕草を見せつけ、男は初めての感覚に身も心も奪われて喘ぐ獲物の身体から一旦身体を離す。

「すごい匂いだな……ここまでエッチな子だったとは思わなかったよ……」



「……はああんっ、そんなんじや……」

どれほど否定しようにも、部屋には十代の少女特有の汗の匂いと、それすら消してしま
いそうなほどに強い、愛蜜の酸味のある匂いが満ちている。

(……これ……私の匂い……?)

やつと薄れていく快感と入れ替わりに広がるのは羞恥と悔しさ。

(私、こんな変質者にエッチなことされて……気持ちよくされちゃったんだ……)
唇を噛み、うっすらと額に汗を滲ませて少女は天井を見詰める。

(……ただ……もうこれで終わるよね……?)

言うことを聞いて男の好きなようにさせたのだ。取引はこれで終わる、そんな少女の甘
い望みは次の瞬間いきり打ち砕かれた。

「くう……ダメだ……っ!」

「……え……?」

押し殺した呻き声にびくりと震わせたその身体に、再び男がのしかかってきた。

「こんなにエロ汁撒き散らしやがって……もう……我慢なんて無理だっ!」

「え? いやっ……!!」

「そんなにチンポが欲しいんなら、今ここで奥まで突っ込んでやるよっ……!!」

「やめっ……ひ……っ!!」

姫割れに押し当てられたモノの硬さに息を呑んだ時には、その先端は既に肉門をこじ開け始めていた。

ギチッ……ギチ……ギチッ！

「ひああっ、痛いっ!!」

堪らず叫んだ柚乃の身体が、ガクガクと震えている。

(……男の人のっ、アレがっ、アソコに入ってきてっ……!!)

男の執拗なクンニリングスで膣口はほぐれてはいるものの、その先はまだ指一本入れたことのない狭隘な処女肉道だ。残っていた愛蜜の助けがなければ引き裂かれるような激痛に失神していたかもしれない。

「ぐっ、うあっ……っ!!」

(い、痛いっ！ お腹の中っ、グチャグチャにされちゃう……こんなの死んじゃう!!)

ゴリゴリと膣壁越しに圧迫される内臓の苦しみと、軋みながら開かれていく処女膜の痛み。二つの激感が少女の意識を霞ませる。

「くはっ、苦し……っ」

絶え絶えに訴える声にも、肉凶器はかえって硬度を増し、未開発の柔肉を抉り掻き回すスピードを上げるだけだった。

「い……痛いっ、痛い……っ」

男が腰を突き入れてくるたびに、破瓜の血を流す狭い膣はズキンズキンと脈打ち悲鳴を上げる。

(ひどい……こんなのひどいよっ……)

女として一番大事な場所、愛する人に捧げるため大切に守らなくてはいけない場所が、今まさに凌辱魔のペニスで残酷に蹂躪されているのだ。

「はあっ、ひぐっ……っ、ひあっ」

紅潮した頬を涙の筋が伝った。

(ああっ、おへその下まで……硬いの入ってくるう……っ!!)

ブチュツ！ ブチュブチュツ！

「ひっ、ひあっ……!!」

(うそっ、まだ入ってくるの……っ!!)

耳を塞ぎたくなるような水音に勢いを得たかのように、肉杭が最奥に向かってズンツ、ズンツ、と捻じ込まれてくる。

(いやあっ！ もう入れないでえ……)

自分の処女膜に男性器が突き立てられ、そのさらに奥まで汚されていくのがリアルタイムで伝わってくる。いつそのこと気絶できればいいとすら思える拷問のような凌辱は、まだ終わらない。

「ほらっ、当たってるぞっ！」

「いやあ……っ！」

ゴリゴリと子宮口の近くを挟られ、絶望的な声を出す。

（もう汚さないでっ！ そこは、赤ちゃんのお部屋なのにつ……！）

「どうだ？ 中でガマン汁出てるのが分かるか……っ!!」

「……やだっ、もう嫌っ……助けて……」

淡い母性すらズタズタにされて、少女は抵抗する気力も奪われていた。

激しい抽送の合間に膈壁で時折弾ける熱い感触。それがガマン汁というものなのかもしれないが、純潔が見知らぬ男のレイプで散らされてしまったというショックと、身体の中心が無残に掻き回される痛みに、哀れな子ウサギの意識はチカチカと点滅し、男の言葉を理解する余裕などなかった。

「……ひっ……ひうっ……やめ……っ」

「もう出すっ……出すぞっ!!」

一層硬く太くなった肉凶器の突き込みが激しさを増して、最悪の瞬間が近いことを少女に伝える。

「その処女マ○コで俺の味をたっぷり味わうんだあ……っ!!」

「ひいっ!? やめてえ……っ!!」

避妊もせずに膣内で射精されるといふ恐怖に、柚乃は残された力を振り絞り腰を引こうとする。だが、

「うう……っ!!」

男が呻き、身体を強張らせた。

「ほらっ！ 出るぞおおオオオッ!!」

男の雄叫びと共に、胎内で灼熱のハレーションが弾けた。

「ひっ!? 嫌あああっ!!」

ドクッ……ドクドクドクッ……!!

つい数時間前まで汚れを知らなかった少女の子宮に、見知らぬ男の汚濁汁が勢いよく注ぎ込まれる。

「お、お腹っ、熱い……っ!」

ドクッ、ドクドクンッ!!

教科書でしか見たことのない、子宮目がけて押し寄せる無数の精子のイメージが少女の脳裏を打ちすえる。

(……ひ……いや……あ……お腹の奥に熱いの……いっぱい入ってくる……う……)

その事実が何を意味するのか、考えることすら恐ろしかった。

(男の人の精子がアソコに入って……私の赤ちゃんのお部屋……汚されちゃった……)

蜜壺の奥深くで振動を続けるローターは取り出せないが、おかげで指で花唇に触れただけで甘美な電流が走り、躰けられた淫肉が涎を垂れ流し始めた。

「んんっ、はぁ、はぁっ……」

ちゆくちゆくという淫らな音と匂いが薄暗い個室にたちまち充満していく。

「ああ……イイっ、指気持ちイイよおっ！」

掌に伝わる振動と、覚えてしまった指使いの相乗効果で、不自由な姿勢だというのに逆に感度は上がっていた。

「はぁっ、もう授業始まつてるのにつ、私だけトイレでこんなことして……はぁっ……はぁんっ、もうイっちゃうっ……」

上り詰めていたその時、左手に握っていた携帯の点滅に柚乃はビクンと身体を震わせる。
(非通知着信……?)

いつでも命令できるように必ず持ち歩くように言われていた携帯だが、男からの指示は必ずメールで来ていた。

「ふぁ……だ、誰っ……?」

鳴り続ける電話に恐る恐る出る。

「聞こえるか? そのままそこでオナニーを続ける……いくまで実況するんだ」

電話越しののはずなのに、男の声が妙に近くで聞こえた気がして、どきりとした。

「あつ、はあ……今、学校の体育館のトイレでつ、はあんつ……個室でオナニーをしてますっ……」

「授業はどうしたんだ？」

「皆はグラウンドでつ、体操してます……つ」

こちらにも一回り大きくなってしまった肉真珠を指でコリコリと扱きながら、柚乃はまるで男がそこにいるかのように腰をくねらせる。

（みんなは私がこんなことしてるなんて、知らないんだ）

そう思うと、自分の浅ましい姿に微かに胸が痛むが、それとは関係なく指は淫らに動き続ける。

（そして、お兄ちゃんも……お兄ちゃんは、私がこんなことしてるって知ったら……どんな顔するの……？）

「皆が真面目に授業を受けてるのに、お前はローターと指でオナニーしてるのか？」

「はいっ、私は……はあつ、トイレでオナニーしてるイケナイ子です……つ」

答えながら、涙声になっている自分に気づく。

「ふあつ、私、森下柚乃はっ、レイプされたのにイっちゃったヘンタイですっ……」

揺れるストラップの指輪が手の甲を叩き続けている。

（でもっ、知って欲しいいっ……こんなにいやらしいことしててもっ、毎晩知らない男の人

のオチンチン舐めていても、お兄ちゃんのことしか考えてないって……気づいて欲しいっ」
 「最初は泣いて嫌がったクセに、いくこと覚えてからはバイブもチンポもすっかり病みつきになりやがって」

「ふぁ、ふぁいつ……私はっ、体操着のままオマ○コ弄ってるヘンタイ女っ、です……悪い子です……っ！ ごめんなさいっ！」

ちゆくちゆくと鳴り続けている淫花弁に携帯を近づけて、柚乃は思わず叫んでいた。

「だけど私はっ、お兄ちゃんが……はあっ……好きっ……はあっ、ずっと……ずっとずっとお兄ちゃんが好きですっ……っ！」

そう叫んだ途端、籠が外れたように、涙が堰を切って溢れ出した。

「ずっと昔に約束したんだもん……大きくなったら結婚しようってくれたんだもんっ、はあっ……だからっ、この指輪っ、お兄ちゃんが忘れていたとしても私は……ずっと……っ」

店じまいするからと怒られても何度も何度も弾を買って取ってくれた指輪は、まだ幼い指にはぶかぶかで、それでも嬉しくて、落とさないように手を握ってもらって家まで帰った。

「……ずっと、ずっとずっと覚えているからっ……大好きだからっ!!」

ひっく、と大きくしゃくり上げて、柚乃は携帯を額に当てたまましゃがみ込んでしまう。

「……ご、ごめんなさい……」

少しの沈黙。

「……………お前のアニキが羨ましいよ」

ぽつりと響いたその泣きに、柚乃は驚いて顔を上げる。

(今……この人、泣きそうだった……?)

「いいから続ける」

男の声がまた冷たい響きに戻った。

「さあ、イクんだ、どんなに強がってもお前の身体は俺を忘れられない……俺の命令しか聞けない、そういう身体になってるんだよ」

「ひゃ？ はあつ、あああつんっ!!」

その言葉を聞いた途端、柚乃の指はさつきよりも激しく陰唇を弄り始めた。

じゅぷつ、じゅぷつ!!

「なんでっ？ 指がっ、指が勝手に動いちやうっ……はっ、あつ、もうだめっ、自分の指でイっちゃうっ!!」

何がなんだか分からないまま、柚乃は床を転げて悶え叫ぶ。

「はあつ、まだだっ！ まだイクなっ!!」

「お兄ちゃんごめんなさいっ、私っ、またおかしくなっってイっちゃうのおっ!!」

プシヤアア、と潮を吹きながら体操着の少女は携帯を握り締めて痙攣した。

「イクうううっ!!」

すぐに差し込まれてきた熱い舌に、気持ちのままに舌を差し出して応える。

「……んっ、ぷはぁ……っ……っ……ユウっ！」

酸素を求め軽く開いた口はすぐにまた塞がれて、菌列をなぞられる。そのたびに背筋にゾクゾクと電気が走った。

（はあっ……キスだけで、こんなに痺れちゃうんだ……）

腰まで蕩けてしまいそうな深いキスに、ずるずると腕から力が抜けていく。

「じゅ……っ……ぶちゅっ」

キスの角度が一層深まり、両膝を床に突いてしまった弾みで、爪先に当たった空き缶が、カラカラと転がっていく。

「……うんっ……お兄ちゃんっ、ビールくさいよお……」

そう言いながらも、柚乃の手は兄の吐息を愉しみ、シャツを捲り上げて胸の引き締まった筋肉をなぞる。

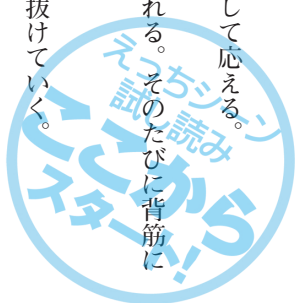
「こんなにたくさん飲んじゃって……ダメだよ……」

「じゃあ、今度はユウのいやらしい涎をいっぱい飲ませてくれ」

じゅるじゅるじゅる、と舌ごと口内を思いきり吸われて、思わず胸をドンドンと叩く。

「んんんっ、んふうーっ……!」

長々と続く強引なキスに、混じりあった互いの唾液が口の端から滴り落ちる。



(あ、頭の中……ぼーっとしちゃう……)

「……ふぁ……っ……もぉ……まだ酔っ払ってるでしょ……お……っ」
 やつと解放され息を弾ませていると、思いきり抱きすくめられる。

「……いいんだな？」

耳元で囁かれて、心臓が高鳴る。

「え……？」

「本当に……こんなお兄ちゃん、いいんだな？」

二人の焦点が合う。

「……お兄ちゃんが、いいの」

柚乃の瞳が、とろりと、蕩けた。

「柚乃を、お兄ちゃんのペットにして」

ソファを軋ませながら、二つの影が絡みあっている。

「お兄ちゃんとなら……あむ……ちゅ……っ……どんなにイケナイことでも……私……」

むしゃぶりつくようにまた口づけをせがむ小さな影。

「お兄ちゃん……キス、上手だね……」

妹の全てを知り尽くそうとするかのように這い回る舌を、小さな舌で懸命に受け止めながら、少女の柔肉はぐずぐずと熱くぬかるんでいく。

「……彼女とか……いたの……？」

「いや……ユウのことしか考えられなかったから……お前しか抱きたくなかったから……他の誰ともしてないよ」

「お……お兄ちゃん……私も……！」

（ダメ……もう、お兄ちゃんのことしか考えられない……お兄ちゃんに濡れちゃう……うん……濡れたい……っ!!）

「ユウも……はあっ、舌使いがすごく上手くなった……」

ぴちやぴちやと唾液を貪りながらそんなことを言われると、自然と腰がくねってしまう。

「お兄ちゃんっ、私……もう……っ！」

「はあっ、そんな顔して言うなよっ……俺が我慢できなくなる……っ！」

心だけじゃない。もつと深く繋がりたい。そんな思いに支配されて、身体が自然に動いていた。

（お兄ちゃんの全部が欲しい……!!）

「お兄ちゃんっ、ちょうだい……っ！」

パンティーを脱ぎ棄てて、そそり立つ剛直に跨がると、一気に腰を沈める。

「そんな可愛い顔して……なんて悪い子なんだ……っ!!」

「だつてっ、はぁあつ……お兄ちゃぁんんっ!!」

「ふぁあつ!!」

溜めていた息を一気に吐き出し、一樹が腰を突き上げる。

(お兄ちゃんのオチンチンっ、硬くて気持ちいい……っ!!)

思わずお尻を振つてしまうと、目ざとく見つけられ、がっちり腰を掴まれる。

「なんだ、もうお尻振っちゃつて、エッチな子だな……兄ちゃんのチンポ、そんなに食べたかったのか?」

「う……うんっ」

「だつたらいくまで自分でお尻を振るんだ」

恥ずかしい告白をさせられて、はにかみながら柚乃は頷き、腰を上下に動かし、膣肉でしゃぶるようにペニスを扱く。

「柚乃……お兄ちゃんの硬いオチンチン大好きなの……っ……」

一樹が感極まった声を出す。

「ユウ、ユウ……本当にイケナイ子だっ!!」

「お兄ちゃんっ!!」

ブチユブチユブチユツ!!

互いの淫液が音を立てて攪拌されていく。

はだけた制服の下から覗く乳房が突き上げのたびに躍り、玉の汗を振り撒く。

「おにいちゃ、おにいちゃ……っ!!」

ソファが軋むたびにピストンは早まり、快感の波が押し寄せる。

愛する牡の精子を子宮の奥まで招き入れようと粘度を増した愛蜜が結合部から溢れては白く泡立つ。

「私ねっ、あの日お兄ちゃんが私を探してくれてっ……はあんっ、とても嬉しかったのっ……だからっ……今度はっ、んんっ、はあああっ……!!」

もどかしかったブレザーもブラウスも、震える手で剥ぎ取られていく。ブラジャーが床に落ち、裸の胸と乳房が密着すると、それだけでより深く繋がっているという実感が官能を加速させる。

「……だから……っ、今度は私がお兄ちゃんのこと……っ、全部受け止めたいのっ!!」
腰を打ちつけあい、舌を絡ませる。

「ああ、お兄ちゃんっ……ジュチュッ……チュバツ……すきい……ジュプウツ」
（感じるよおっ！ お兄ちゃんのおチンチンも柚乃の赤ちゃんのお部屋にっ、いっぱいキスしてるっ!!）

ひんやりとしていたはずの空気は、いつの間にか熱く噎せ返るような臭気に満たされて

いた。

（凄いつ、お兄ちゃんの匂いと私の匂いが混ざってっ……こんないやらしい匂いになってるんだ……っ!!）

「私っ、お兄ちゃんにだったら……んちゅっ……柚乃、何されてもいいから……だから全部っ、お兄ちゃんの全部をちようだいっ!!」

感極まったまま、唾液の糸を引いて仰け反る柚乃。

「イクっ、お兄ちゃんっ、もう駄目っ!」

激しさを増したグラインドに、愛らしい肉人形はどうとう悲鳴を上げる。

「はあっ、出すぞっ! 一週間溜め込んだ兄ちゃんの濃いザーメン、お前のマ○コでたっぷり味わえよっ!!」

互いの手を取りあい、指先を絡ませあい、これ以上はないというほどに固く抱きあって、二人は一つの影となった。

「いいよっ、柚乃のに全部出してっ、お兄ちゃん……っ!」

「ほらっ、俺のザーメン残らず注ぐぞおっ!!」

「はあっ……んんっ……来てえっ!! 柚乃と一緒にキモチ良くなってえっ!!」

すらりとした両脚を愛する兄の背中で交差させて、淫妹は声の限りに嬌声を上げる。

「柚乃の中にいっぱい出してえっ! 柚乃はお兄ちゃんのっ、お兄ちゃんだけのモノなの

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>